

(補足資料) 職業経歴が結婚への移行に与える影響

麦山 亮太

(東京大学大学院人文社会系研究科博士課程)

mugiyama@l.u-tokyo.ac.jp

表 1 分析に用いる変数の記述統計量

	男性	女性		男性	女性
初婚への移動			大企業	0.322	0.320
生起	0.006	0.008	官公庁	0.080	0.073
非生起	0.994		直近 3 年間の雇用形態の変化		
経過月数/12	8.10	8.95	正規雇用一貫	0.792	0.741
	(4.79)	(4.50)	非正規雇用一貫	0.077	0.150
出生コホート			自営一貫	0.060	0.016
1966-70 年	0.394	0.409	→正規雇用	0.031	0.035
1971-75 年	0.378	0.368	→非正規雇用	0.024	0.051
1976-80 年	0.228	0.223	→自営	0.016	0.006
学歴			直近 3 年間の職業の変化		
中学	0.065	0.037	専門管理一貫	0.136	0.208
高校	0.459	0.395	事務一貫	0.160	0.393
専門	0.137	0.204	販売一貫	0.148	0.144
高専短大	0.040	0.208	熟練一貫	0.221	0.078
大学大学院	0.299	0.156	半非熟練一貫	0.214	0.067
15 歳時ひとり親	0.060	0.061	→専門管理	0.009	0.015
無業	0.031	0.069	→事務	0.022	0.045
各時点雇用形態			→販売	0.023	0.026
正規雇用	0.824	0.776	→熟練	0.031	0.013
非正規雇用	0.101	0.201	→半非熟練	0.036	0.011
自営	0.076	0.022	直近 3 年間の企業規模の変化		
各時点職業			小企業一貫	0.256	0.254
専門管理	0.145	0.223	中企業一貫	0.261	0.260
事務	0.182	0.438	大企業一貫	0.300	0.291
販売	0.170	0.170	官公庁一貫	0.073	0.062
熟練	0.252	0.091	→小企業	0.040	0.051
半非熟練	0.250	0.078	→中企業	0.040	0.042
企業規模			→大企業	0.023	0.029
小企業	0.297	0.305	→官公庁	0.007	0.011
中企業	0.301	0.302	N of obs.	122418	120106

注) 値は person-month 単位で算出した平均値 (割合) を, 括弧内は標準偏差を示す。

表 2 初婚の生起に関する補対数対数モデル

	男性				女性			
	model 1		model 2		model 1		model 2	
経過月数/12	0.439*** (0.039)		0.435*** (0.039)		0.432*** (0.039)		0.432*** (0.039)	
× 2 乗	-0.018*** (0.002)		-0.017*** (0.002)		-0.018*** (0.002)		-0.018*** (0.002)	
出生コホート (ref: 1966-70 年)								
1971-75 年	0.049	(0.084)	0.051	(0.085)	-0.038	(0.072)	-0.024	(0.072)
1976-80 年	0.098	(0.103)	0.130	(0.103)	-0.103	(0.087)	-0.095	(0.088)
学歴 (ref: 高校)								
中学	0.069	(0.186)	0.116	(0.187)	-0.236	(0.204)	-0.209	(0.206)
専門	-0.152	(0.123)	-0.156	(0.123)	-0.399***	(0.094)	-0.424***	(0.095)
高専短大	0.119	(0.189)	0.085	(0.190)	-0.193*	(0.089)	-0.209*	(0.090)
大学	-0.066	(0.101)	-0.093	(0.101)	-0.294**	(0.102)	-0.315**	(0.102)
15 歳時ひとり親	-0.133	(0.169)	-0.113	(0.170)	-0.226	(0.148)	-0.224	(0.148)
無業	-1.053**	(0.357)	-1.001**	(0.358)	1.499***	(0.075)	1.530***	(0.075)
各時点雇用形態 (ref: 正規雇用)								
非正規雇用	-1.048*** (0.196)				-0.115 (0.082)			
自営	-0.282† (0.163)				0.276 (0.202)			
各時点職業 (ref: 事務)								
専門管理	0.159 (0.123)				0.326*** (0.085)			
販売	0.144 (0.128)				0.046 (0.093)			
熟練	0.156 (0.127)				0.062 (0.121)			
半非熟練	-0.125 (0.134)				-0.085 (0.140)			
各時点企業規模 (ref: 中企業)								
小企業	0.044 (0.107)				0.052 (0.084)			
大企業	0.101 (0.096)				0.053 (0.082)			
官公庁	0.244† (0.147)				0.014 (0.132)			
直近 3 年間の雇用形態の変化 (ref: 正規雇用一貫)								
非正規雇用一貫	-1.503*** (0.274)				-0.267** (0.098)			
自営一貫	-0.324† (0.191)				0.276 (0.243)			
→正規雇用 ^{a)}	-0.415† (0.244)				0.148 (0.192)			
→非正規雇用	-0.488† (0.290)				0.410** (0.145)			
→自営	-0.123 (0.288)				0.426 (0.360)			
直近 3 年間の職業の変化 (ref: 事務一貫)								
専門管理一貫			0.160 (0.129)				0.381*** (0.089)	
販売一貫			0.183 (0.135)				0.040 (0.101)	
熟練一貫			0.095 (0.137)				0.099 (0.131)	
半非熟練一貫			-0.161 (0.145)				-0.145 (0.155)	
→専門管理			0.024 (0.366)				-0.305 (0.309)	
→事務			-0.220 (0.299)				-0.105 (0.179)	
→販売			-0.352 (0.323)				0.027 (0.208)	
→熟練			0.302 (0.232)				-0.064 (0.293)	
→半非熟練			-0.151 (0.254)				0.169 (0.296)	
直近 3 年間の企業規模の変化 (ref: 中企業一貫)								
小企業一貫			0.018 (0.119)				0.013 (0.092)	
大企業一貫			0.127 (0.104)				0.071 (0.088)	
官公庁一貫			0.300† (0.157)				0.050 (0.142)	
→小企業			0.522** (0.198)				0.176 (0.163)	
→中企業			0.355† (0.206)				-0.072 (0.182)	
→大企業			0.378 (0.257)				-0.282 (0.235)	
→官公庁			0.133 (0.473)				-0.344 (0.336)	
切片	-7.300*** (0.227)		-7.303*** (0.232)		-7.053*** (0.206)		-7.065*** (0.209)	
N of obs.	122418				120106			
N of events	745				1018			
LR χ^2 (df)	289.0 (19)		315.3 (31)		562.4 (19)		591.3 (31)	
AIC	8838.2		8835.8		11217.7		11212.8	

注) 値は係数を, 括弧内は標準誤差を示す. † $p < 0.1$, * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$ (両側検定)

a) 直近 3 年間に正規雇用以外の雇用形態から正規雇用に移動してきたことを示す. 他も同様である.

データの加工についての補足

リスク暴露期間の定義

JGSS-2009LCS の公開データには回答者の出生月の情報が削除されているため、個人の年齢を月単位で精確に特定することができない。そこで本稿の分析では、すべての個人は 4 月 1 日時点で出生し、中学卒業から 1 年後の 4 月にちょうど 16 歳、中学卒業から 3 年後の 4 月にちょうど 18 歳となるものと仮定して person-month データを作成した。

月の情報の欠損について

職業経歴・家族経歴に関する欠損をなるべく少なくおさえるため、職業経歴・家族経歴の開始年の情報は揃っているが月の情報が欠損していた場合には、当該の経歴は 4 月から始まったものとして扱う。また、こうした対処の結果、同じ月に複数回の変化が生じた場合には、もっとも新しい変化のみを person-month データに反映する。

非正規雇用の定義

パート・アルバイト・内職、派遣社員、契約社員、嘱託社員を選択した場合を非正規雇用とする。内職は雇用者でないため定義上は除外すべきであるが、JGSS-2009LCS では「パート・アルバイト・内職」は 1 つのカテゴリとして設けられているため、内職を除くことができないため、内職を非正規雇用に含めている。ただし、若年者で内職に従事するものは少ないと考えられるため、分析結果に大きな違いは現れないだろう。

参考文献

- [1] 有田伸, 2016, 『就業機会と報酬格差の社会学——非正規雇用・社会階層の日韓比較』東京大学出版会。
- [2] Blackwell, Debra L. and Daniel T. Lichter. 2004. "Homogamy Among Dating, Cohabiting, and Married Couples." *Sociological Quarterly* 45(4):719–37.
- [3] Blossfeld, Hans-Peter, Erik Klijzing, Melinda Mills, and Karin Kurz, eds. 2005. *Globalization, Uncertainty and Youth in Society*. London: Routledge.
- [4] Bukodi, Erzsébet. 2012. "The Relationship between Work History and Partnership Formation in Cohorts of British Men Born in 1958 and 1970." *Population Studies* 66(2):123–45.
- [5] 原純輔・盛山和夫, 1999, 『社会階層——豊かさの中の不平等』東京大学出版会。
- [6] 平田周一, 2011, 「女性のライフコースと就業——M 字型カーブの行方」石田浩・近藤博之・中尾啓子編『現代の階層社会 2: 階層と移動の構造』東京大学出版会, 223–38.
- [7] 岩澤美帆・三田房美, 2005, 「職縁結婚の盛衰と未婚化の進展」『日本労働研究雑誌』47(1):16–28.
- [8] Kalmijn, Matthijs. 2011. "The Influence of Men's Income and Employment on Marriage and Cohabitation: Testing Oppenheimer's Theory in Europe." *European journal of population* 27(3):269–93.
- [9] Kalmijn, Matthijs and Ruud Luijkx. 2005. "Has the Reciprocal Relationship between Employment and Marriage Changed for Men? An Analysis of the Life Histories of Men Born in The Netherlands between 1930 and 1970." *Population Studies* 59(2):211–31.
- [10] 金子隆一・見田房美, 2012, 「第 1 章 夫妻の結婚過程」国立社会保障・人口問題研究所編『わが国夫婦の結婚過程と出生力』平成 22 年第 14 回出生動向基本調査第 1 報告書, 12–19.
- [11] 加藤彰彦, 2004, 「配偶者選択と結婚」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容——

- 全国家族調査 [NFRJ98] による計量分析』東京大学出版会, 41-76.
- [12] 水落正明, 2006, 「学卒直後の雇用状態が結婚タイミングに与える影響」『生活経済学研究』22:167-76.
- [13] 茂木暁, 2014, 「日本女性の結婚への移行の再検討——夫婦の「出会い方」の違いに注目して」『人口学研究』50: 55-74.
- [14] 永瀬伸子, 2002, 「若年層の雇用の非正規化と結婚行動」『人口問題研究』58(2):22-35.
- [15] 西村純子, 2014, 『子育てと仕事の社会学——女性の働きかたは変わったか』弘文堂.
- [16] Oppenheimer, Valerie Kincade. 1988. “A Theory of Marriage Timing.” *American Journal of Sociology* 94(3):563-91.
- [17] Oppenheimer, Valerie Kincade, Matthijs Kalmijn, and Nelson Lim. 1997. “Men’s Career Development and Marriage Timing during a Period of Rising Inequality.” *Demography* 34(3):311-30.
- [18] Oppenheimer, Valerie Kincade. 2003. “Cohabitation and Marriage During Young Men’s Career-Development Process.” *Demography* 40(1):127-49.
- [19] Raymo, James M. 2003. “Educational Attainment and the Transition to First Marriage among Japanese Women.” *Demography* 40(1):83-103.
- [20] 酒井正・樋口美雄, 2005, 「フリーターのその後——就業・所得・結婚・出産」『日本労働研究雑誌』535:29-41.
- [21] 佐々木昇一, 2012, 「結婚市場における格差問題に関する実証分析——男性の非正規就業が交際行動や独身継続に与える影響」『日本労働研究雑誌』54(2): 93-106.
- [22] 佐々木尚之, 2012, 「不確実な時代の結婚——JGSS ライフコース調査による潜在的稼働力の影響の検証」『家族社会学研究』24(2):152-64.
- [23] Sessler, Sharon and Frances Goldscheider. 2004. “Revisiting Jane Austen’s Theory of Marriage Timing: Changes in Union Formation among American Men in the Late 20th Century.” *Journal of Family Issues* 25(2): 139-66.
- [24] 仙田幸子, 2002, 「既婚女性の就業継続と育児資源の関係——職種と出生コーホートを手がかりにして」『人口問題研究』58(2): 2-21.
- [25] Singer, Judith D. and John B. Willett. 2003. *Applied Longitudinal Data Analysis: Modeling Change and Event Occurrence*. Oxford University Press. (=菅原ますみ監訳, 2014, 『縦断データの分析Ⅱ イベント生起のモデリング』朝倉書店.)
- [26] 新谷由里子, 1998, 「結婚・出産期の女性の就業とその規定要因——1980年代以降の出生行動の変化との関連より」『人口問題研究』54(4): 46-62.
- [27] 津谷典子, 2009, 「学歴と雇用安定性のパートナーシップ形成への影響」『人口問題研究』65(2):45-63.
- [28] 大和礼子, 2014, 「女性のライフコースと就業パターン——変化する日本型雇用システム」太郎丸博編『東アジアの労働市場と社会階層』京都大学学術出版会, 81-109.
- [29] Yu, Wei-hsin. 2009. *Gendered Trajectories: Women, Work, and Social Change in Japan and Taiwan*. Stanford, California; Stanford University Press.
- [30] Yu, Wei-hsin. 2010. “Enduring an Economic Crisis: The Effect of Macroeconomic Shocks on Intragenerational Mobility in Japan.” *Social Science Research* 39(6): 1088-1107.
- [31] 趙彫・水ノ上智邦, 2014, 「雇用形態が男性の結婚に与える影響」『人口学研究』50: 75-89.